

女仙

芥川龍之介

青空文庫

昔、支那シナの或田舎あるに書生しよせいが一人住んでいました。何しろ支那のことですから、桃の花の咲いた窓の下に本ばかり読んでいたでしょう。すると、この書生の家の隣うちに年の若い女が一人、——それも美しい女が一人、誰も使わずに住んでいました。書生はこの若い女を不思議に思っていたのはもちろんです。実際また彼女の身の上をはじめ、彼女が何をして暮らしているかは誰一人知るものもなかったのですから。

或風のない春の日の暮、書生はふと外へ出て見ると、何かこの若い女の罵ののしっている声が聞えました。それはまたどこかの庭にわ鳥とりがのんびりと鬨ときを作っている中に、如何いかにも物ものしく聞えるの

です。書生はどうしたのかと思ひながら、彼女の家の前へ行つて見ました。すると眉を吊り上げた彼女は、年をとつた木樵りの爺さんを引き据え、ぽかぽか白髪頭を擲つてゐるのです。しかも木樵りの爺さんは顔中に涙を流したまま、平あやまりにあやまつてゐるではありませんか！

「これは一体どうしたのです？ 何もこういう年よりを、擲らないでも善いじゃありませんか！——」

書生は彼女の手を抑え、熱心にたしなめにかかりました。

「第一年上のものを擲るといふことは、修身の道にもはずれてゐる訣です。」

「年上のものを？ この木樵りはわたしよりも年下です。」

「冗談を言つてはいけません。」

「いえ、冗談ではありません。わたしはこの木樵りの母親ですから。」

書生は呆氣あっけにとられたなり、思わず彼女の顔を見つめました。やつと木樵りを突き離れた彼女は美しい、——というよりも凜々りりしい顔に血の色を通わせ、目まじろぎもせずにごう言うのです。

「わたしはこの倅せがれのために、どの位苦勞をしたかわかりませんが、けれども倅はわたしの言葉を聞かずに、我わがまま儘ばかりしてしましたから、とうとう年をとつてしまつたのです。」

「では、……この木樵りはもう七十位でしょう。そのまた木樵りの母親だというあなたは、一体いくつになつて居るのです？」

「わたしですか？ わたしは三千六百歳です。」

書生はこういう言葉と一しよに、この美しい隣の女が仙人だつたことに気づきました。しかしもうその時には、何か神々しい彼女の姿は忽ちどこかへ消えてしまいました。うらうらと春の日の照り渡った中に木樵りの爺さんを残したまま。……

——昭和二年二月——

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春・トロツコ 他十七篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年8月16日第1刷発行

入力：j.utiyaana

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月15日公開

2004年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

女仙

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>